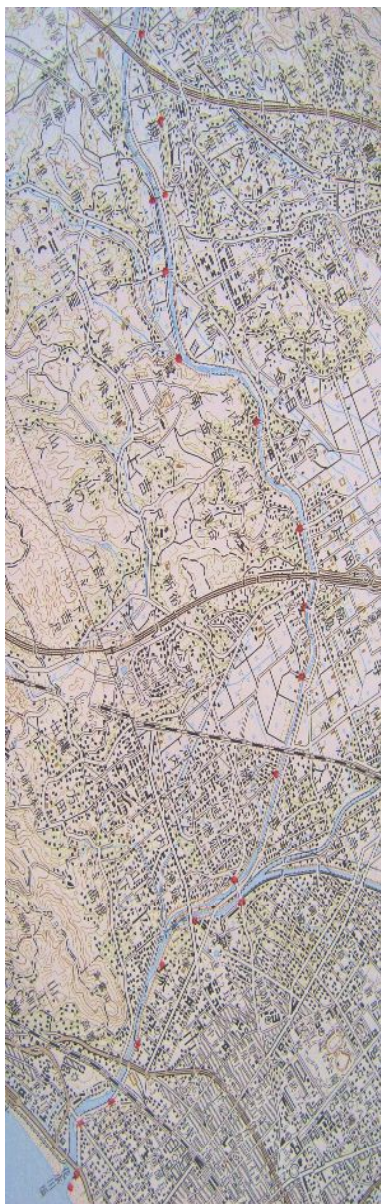


あの 森 を訪ねて

春嶽水源林から金目川そして海へ



大山の急斜面を駆け下りた水は、里を潤し、他の川と合流しながら勢いを増し、ようやく山地を抜けて、広い平野に飛び出そうとしている所にたどり着いた。

前回に続き、水の流れを追って大磯の海まで歩くことにする。



下流は花水川と呼ばれている。その名にふさわしい川を見るために、桜が満開となった4月初めの日曜日のことである。

中里橋下の魚道を見ながら、東名高速道の下を過ぎると川は大磯丘陵の先端の崖地に沿って流れる。

左手の畑地の向こうには渋沢丘陵の台地の上に大槻団地の建物が見える。「槻」とはケヤキの古名である。

川岸の県道は、歩道がなく危険なため、畑地の中の農道を歩く。

秦野市から平塚市に入った所で、川に架かる歩道橋を渡り対岸へ。右手には土屋の低い山並が見える。

土屋は頼朝の挙兵に参加した武将の一人である土屋氏が治めた地域である。台地の上には神大湘南



座禅川との合流地点

校舎や県の農業技術センター、東海大学の野球場等がある。土屋橋を過ぎ、座禅川との合流点から川

岸に沿った山裾の道を歩く。水



が少し濁ってきたようである。水面に泡を浮かべている。

左手には東海大学の校舎のかなたに春岳水源林のある大山の三角形の山容が望まれる。

縄文海進

ここ湘南の水田が広がる地域は、今から6千年程前は海の底で海面は今より2～3m程高い所で、金目付近が海への出口であった。

周囲の台地上には旧石器時代からの王子ノ台遺跡や縄文中期の遺跡として知られるや五領ヶ台遺跡等が点在しており、クジラやサメ等の骨も出土している。

金目地区

ここ金目地区は、扇状地の要に当たる地域で、金目観音を始として歴史的にも面白い所である。明

治の自由民権運動の県内での中心地で、地区の豪農が核となって生活改革運動、実業教育活動、福祉教育活動を推進した。のちに秦野高校、平塚農業高校や県立盲学校の前身となった三郡共立学校や中郡盲人学校を創設された先進的な地域であった。

御所堤

北金目のバス停付近で川は不自然に大きく右にカーブする。地元の有志が作った「かなひ（金目）の歴史ガイドブック」によると、もともと金目川は真っ直ぐ鈴川方面に流れていたのを水田開発のため堤防を築き右に曲折させ南金目や片岡方面に水供給を図ったのだという。

そのため、洪水の時はこの個所が決壊し下流に大きな被害を与え、日照りで水不足のときは、下流地域との水争いが度々起こった。

金目川は地域の重要な恵みの川であったが、洪水や渇水で人々を苦しめる川でもあった。

慶長13年（1609）にも大洪水があり、その被害と農家の苦し



上流から見た御所堤

みを鷹狩りのため平塚の中原御殿に来ていた徳川家康が聞きつけ、敷き12間、馬踏み6間、高さ2間、長さ318間（572m）の

堤を築かせた。この堤が「御所堤」と呼ばれる由来である。

もともとその後も度々決壊し、そのつど改修されてきたので往時のものがそのまま残っているわけではない。堤防下に行ってみるとこの部分の川は住宅地より高く天井川となっている。

暴れ川「金目川」の洪水の軽減



前河原橋

と水の安定供給を図るため春岳水源林の取得と森林の育成となったことは前回記述した。

この付近には人道橋が多い。中でも前河原橋は、平成19年2月に改修された木橋でめずらしい。

すぐ下流は金目の観音様で親しまれている金目観音である。山門は平塚市の本堂は県の、そして本堂内厨子は国の重要文化財に指定されている由緒ある寺である。

隣の広場では、桜祭りが行われており、大勢の人で賑わっていた。

河原では円陣を組んで飲み語らう人々が楽しげである。桜が咲くと誰でも楽しい気分になる。

飯島取水堰

小田原厚木道路の下を過ぎるとほどなく飯島の取水堰に着く。

この堰は下流の取水堰を纏め、水利用を調整するために昭和27年（1952）に県によって作られ

た。

左岸に取水口を設け、左岸地区の灌漑だけでなく、サイホンで川を横断し右岸地区にも灌漑している。これにより上流と下流の水争いが解決したとのことである。



飯島取水堰と大山・春嶽水源林

ここより上流に取水堰は11箇所数えられた。一部は、使用が中止されているものもあるが、地形に合わせてきめ細やかに設置され、今も利用されている。

すぐ近くの旧農業試験場の跡地では、県立花と緑のふれあいセンターが平成22年の開園を目指して整備が進められていた。

また、右岸部の堤防は、平塚市の金目川サイクリングコースとして整備されていて、車は殆ど通らず歩きやすい道となっている。

左右は水田や畑地となり、山並みが見えなくなった。左岸の川沿いにある県道平塚秦野線は車が切れ目なく走る。

しばらくすると左右は住宅地となり、春の明るい日差しの中を散歩する人とすれ違う。

川幅も広がり、水の流れもゆるやかになり、中洲が多くなってきた。

所々でカルガモや鷺の姿を見ることができる。

東京から56.466kmの新



幹線下を横切り、纏緑道を過ぎる
辺りから右に大きくカーブを描く。
土手にはエノキの大木が目につく
ようになり、木立を残した護岸工
事も行われている。



エノキを残した護岸工事

左手から渋田川と合流した鈴川
が近づいてきた。東雲橋から隣の
鈴川の土手を歩くことにする。

鈴川合流

両川は、暫く並行して流れ、東
雲橋から1kmほど下流で合流し、
花水川と名前を変える。もともと
の川は、今よりも西側を流れてい
て達上池は旧河道上にあたる。古
花水というバス停や古花水川橋と
いう交差点もある。

現在の流路は、宝永4年(17
07)の富士宝永山の爆発による
降灰で川が埋まってしまったため、
江戸幕府が10年以上にわたって、
大名普請として大改修したもので
ある。

花水川と古代のロマン

合流すると川幅も広くなり、水
の流れは目には分からなくなった。
右岸部には、特徴のある山容で、
広重の東海道53次の浮世絵で



高麗山・桜・花水川

も有名な標高167mの高麗山
の春紅葉の新緑を背景に、川岸に
は桜並木が続く。川面に散る花も
あり、まさに花水の名にふさわし
い景色となってきた。

国道1号線に架かる花水橋を過
ぎると河口はもうすぐである。

ここから右岸は唐ヶ原(もろこ
しがはら)。

その名からも分かるように6世
紀頃朝鮮半島を逃れて大磯に上陸
した高句麗人が住んだ地域である。
高麗山にその名残を残す。

朝鮮半島からの帰化人は、花水
川をさかのぼり大山を目指して開
拓を進めていった。

河 口へ

大山の春岳水源林を出た水は、
ようやく海に着いた。

川水は、大部分が海岸の砂に吸
い込まれ、残りが細い筋となって
打ち寄せる波に巻き込まれる。

山を出て海まで来たが、川沿い
には夫々の生活と歴史があり、水
とともに人々の営みがある。

しかしながら、下流域の住宅地
の広がりを見ると、水を利用し作
物を生産してきた営みは都市の拡
大によって縮小し、生活とのかか
わりあいも薄れ、川と水のある環
境という癒しの空間的存在になっ
てきているように感じられた。

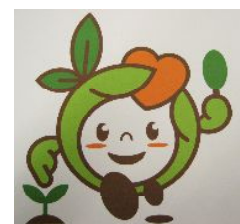
記念碑

上流に森林を育て守ってき人々
がいることを知る人は、どれほど
いるのだろうか。水は山から流れ
てくるのは当たり前というのが大
多数の普通感覚であるのもしかた
がない。私たちの思い入れで、そ
れをせめても仕方がない。

春岳山の記念碑は、山だけでな
く、河口近くの川沿いの桜並木
の中にもう1つ、いや中流域も入れ
て、あと2つ位建てたほうがいい
のかもしれない。



ヤビツ峠から、水の流れを追っ
て海まで来た。20数km、2日
間の小さな旅気分が気持ち良く歩
けた。(H21,4 事務局 瀧澤)



かなりんちゃん 61全国植樹祭